

誰もが知りたい
ローザンヌ宣教シリーズ

No.21
伝道と社会的責任
ーグランド・ラピッツ・リポートー



*Let
the Earth
hear
His Voice*

**Lausanne
Occasional
Papers**

No.21
The Grand Rapids Report

**Evangelism and
Social Responsibility**

Lausanne Committee for World Evangelization

関西ミッション・リサーチ・センター/日本福音同盟

誰もが知りたい
ローザンヌ宣教シリーズ

№. 21

伝道と社会的責任

(1984年)

ローザンヌ宣教シリーズ

邦訳出版に際して

近代におけるキリスト教会の宣教歴史にとって、1974年7月、スイスのローザンヌで開かれた世界宣教国際会議は、極めて画期的なものとして高く評価されてきました。単に、世界150カ国から、プロテスタント135教派または団体から、約2500人がキリスト者にとっての至上命令である宣教について、共に考え、学び、論じ、祈りあうために集まったというだけが、その評価のすべてではありません。（もちろん、それ自体すばらしいことです）。むしろ、次の二点にそのような高い評価の焦点があるようです。ひとつは単に10日間という会議だけに終わらず、そこで考え、論じられたことが、継続的、かつ進展的に今に到るまで尚も、変動を続ける現代の世界において教会は如何にその宣教の責任を果たしてゆくべきか、組織的に委員会などによって考え、論じ続けられていることです。1980年6月にタイ国のパッタヤで開かれた「世界宣教協議会」などはそのよい例です。もうひとつの点は、世界における福音宣教ということが、垂直線的のみにでなく、それとともに、文化及び社会をグローバルに、巾広く抱えながら人間の全人的な救いということとして、福音主義の立場から真剣に取りあげられて来たことです。

今まででもそうでしたが、特に現代では、キリストの福音宣教、世界の福音化ということは、各自、各教会が、おのおの置かれている文化的、社会的現実の中で宣教の業に参与しながら、同時に広く世界的な視野に立った教会、または各自としての性格づけ、位置づけを前向きの姿勢で維持してゆかねばなりません。ローザンヌ宣教シリーズの多くは、そのような大切な問題を極めて適切に取扱っています。また、関西ミッション・リサーチ・センター（KMRC）も、その創設当初より、日本という文化と社会の中にありなが

ら、世界的な視野をもった福音主義の宣教研究所として活動して来たことを思いますと、今回そのシリーズを、日本福音同盟の理解ある協力を得て、このような型で邦訳出版し得るのは、神の不思議な御摂理であると考えざるを得ません。今後、順次邦訳出版する計画のこのシリーズは、いづれもキリスト者であれば文字通り「誰もが知りたい」内容のものであることを確信しています。また、出来るだけ多くの人々に、愛読書宣教シリーズとして利用して頂き、みんなで、日本の宣教、世界の宣教について考え、学び、祈るための貴重な資料となるよう願っています。

終わりに、このシリーズの日本語翻訳及び出版権を許可下さったローザンヌ世界宣教国際会議の継続委員会と、このシリーズの出版に全面的に協力して下さい下さった日本福音同盟、また側面から支援して下さい下さったノールウェー・ルーテル伝道会に心から感謝の意を表わします。

1983年4月3日イースター

関西ミッション・リサーチ・センター (KMRC)

理事長 服 部 嘉 明

目 次

はしがき	1
序 論	5
(a) 協議会の背景	5
(b) 聖書と文化	6
1. 礼拝と感謝への召し	9
2. 世界伝道への召し	9
(a) 現代の必要	9
(b) 定 義	10
(c) 伝道の動機	11
3. 社会的責任への召し	12
(a) 現代の必要	12
(b) 定 義	13
(c) 社会的責任の動機	14
4. 伝道と社会的責任の関係	16
(a) 歴史的背景	16
(b) 特定の情況と賜物	17
(c) 三種類の関係	19
(d) 優先性の問題	22
(e) 幾つかの事例	24
5. 御国の福音	26
(a) 救	26
(b) 神の国	28
(c) 御国のしるし	29
(d) 御国の範囲	32
6. 歴史と終末	35
(a) 偽りの夢	36
(b) いろいろな千年王国観	37

(c) 来たるべきさばき	38
(d) 終末の幻	40
(e) 連 続 性	41
(f) クリスチャンの望み	43
7. 行動のための指針	44
(a) 伝道と社会的責任の諸形態	44
1. 社会奉仕と伝道	45
2. 社会的行動と伝道	47
(b) 伝道と社会的責任の諸機関	48
1. 伝道と社会的奉仕	48
2. 伝道と社会的行動	49
(c) 自由社会における地域教会	51
1. とりなし	51
2. 愛	52
3. 教え	53
4. 力	57
5. 職業	57
6. グループ	59
7. 資源	60
(d) 抑圧下の教会	62
1. 首尾一貫性	63
2. 愛	63
3. 証し	64
4. 連帯	64
5. 苦難	64
結 論 服従への召し	67
付録A 協議会出席者	69
付録B 論文と著者	70

はしがき

福音派 (evangelicals) ということばと伝道 (evangelism) ということばは、いつも、ひとまとめにして使われている。そうされることが余りにも多いので、福音的 (evangelical) という形容詞と伝道的 (evangelistic) という形容詞は、一般の人々の頭の中では、しばしば、同じものになってしまっている。だから、福音派が社会問題に関心をもつようになるとき、いつも、だれかの眉毛が吊り上がり、福音の大義に背くようなことになるのではないかと問いつめられるようなことになって、決して驚ろくに当らない。

不幸にも、教会合同運動 (エキュメニカル・ムーヴメント) の歴史が、社会問題に関与することについての福音派の疑惑を強めている。近代教会合同運動は、エジンバラで開かれた 1910 年世界宣教大会の一陶酔ともいえるほどの一宣教熱の中で生れた。その大会議長であったジョン・モットーは、未だキリストのことを聞いたことのない人々が何百万人もいるという事実は、教会に対する「長く続く叱責」だと記した。教会は「この大群衆全体に対する伝道のための」戦略計画を展開しなければならない、と彼は力説した。しかしながら、世界宣教に対する献身熱のこの高揚は、その時から着実に低落し続けたといっていよい。1966 年ベルリンで、1974 年ローザンヌで福音派が開いた二つの世界伝道会議の招集は、不幸なことだが、少なくとも部分的には世界教会会議 (World Council of Churches) に対する信頼の喪失によると理解しなければならない。しかし、世界教会会議のその時の指導者たちもまた、われわれ福音派の多くの者について、社会的関心を欠いていると批判してきたが、それは正当な批判であった。

この二極分化は 1980 年に特に明らかになった。その年、WCC の世界宣教委員会主催による会議「あなたの御国が来ますように」が 5 月にメルボルンで

開催され、次の月に、ローザンス委員会主催による協議会「彼らはいかに聞くだろうか？」がタイのパタヤで開かれたのである。どちらのグループも、これらの集会をこのようなやり方で並置することを意図してはいなかったのだが、そうなったことは、多分、ずっと続いている緊張関係を明らかに示す結果になった。多くの福音派の人々はそのいずれの会議にも出席し、両者の中に希望をもってよい幾つかの理由を見出した。両方の文書を熟読すれば、両者の間に多くの共通基盤があったことは明らかである。しかしながら強調点は違っている。メルボルンにおいては、宣教の必要性は明らかに認められているが、貧しい者、飢えている者、抑圧されている者の叫びが最優先事項になっている。パタヤにおいても、貧窮の中にある者の叫びは聞かれるが（ある小協議会は難民問題に焦点をあてており、もう一つの小協議会は都市貧民の問題に焦点をあてている）、福音を聞いたことのない人々に対する福音宣教の召しが最優先事項とされている。

以上が、1982年6月グラント・ラビッツで開かれた「伝道と社会的責任の間の関係についての協議会」に至る歴史的背景であった。企画委員会は出席者たちが地理的領域、教派的背景、そして福音の見方について、均衡のとれた意見代表となることができるよう、大変な苦勞をした。企画委員は、また、協議会の目標を明確に定義した。委員会は、「聖書と、歴史と、神学と、現代教会、およびそれら相互間の相互作用を学ぶ決意を表明し、その希望と神の祝福を求める祈りを以下のように表明した。

- 「1. われわれがお互いをより良く理解するようになり、お互いの視点をより十分に評価するようになるように。
2. われわれが、表面的意味論的同意によってではなく、聖書による真の神学的同意によって、伝道と社会的責任の間の関係についてより大きな心の一致に達するよう。

3. われわれの伝道的社会的責任をより積極的に全うするために、われわれ自身が献身するように、また他の信者たちを励まして、彼らをもそのことのために献身させるように。」

このように目標が明らかにされていたにもかかわらず、私は、少なからぬ不安をもってグランド・ラビッツに到着したことを告白する。前もって送られていた報告書と応答文書は、お互いの立場について批判的であったばかりでなく、ある場合には、極めて厳しかった。これでは、われわれはどのようにして、同意に達しうると期待できるのか。しかし、われわれの自然な恐れの下に、もしわれわれが神の御言の権威の下にわれわれ自身をへり下らせるなら、神はわれわれを一致させることがおできになる、という確信があった。私にとっては、この協議会は、国際会議の価値を示す、もう一つの劇的な証明であった。われわれが、お互いに離れていて、非武装地域を越えて、手榴弾を投げあうだけであったなら、われわれの態度は不可避免的に厳しくなるし、お互い、相手について型にはまった観念を抱くに至るだけであろう。しかし、われわれが顔と顔とを合わせて（あるいは、アメリカの友人が生き生きと描写したように、目の玉と目の玉とを合わせて）会い、お互いの議論を聞くだけでなく、その議論の背後にある固く心に抱かれている確信に聴き入るとき、われわれはお互いに新しく理解しあい、尊敬しあい、愛し合うのである。このことは、（報告書が明らかにしているように）われわれがすべてのことにおいて意見が一致すると云うことではない。しかし、われわれの一致点は、残りの相違点よりも遙かに大きいのである。

報告書の作成を託されたグループは以下の者から構成されている。アフリカからのゴットフリード・オセイ・メンザーとアジアからのボン・リン・ロー（協議会の共同議長）、ディビッド・ウエルズ（U.S.A）、サムエル・オルソン（ラテン・アメリカ）、それから、私である。はじめの草稿がこのグループ

で承認され、協議会中の金曜日一日と土曜日の午前中、全員出席の会合に提示された。改訂された草稿は、求められた多くの修正を盛り込んで、参加者に郵送で再提示された。その後ごく僅かの修正が加えられて本文が完成した。

グランド・ラビッツの経験を顧みるとき、われわれは、神がわれわれに同じ思い、同じ心を与えて下さったことを、深く感謝する。われわれは、この報告書を個々のクリスチャンと地域教会の学習のために推薦する。そして、神がわれわれの上に置かれた伝道の責任と社会的責任にたいするわれわれの文書による誓約が、ますます実践的で献身的な行動となって現われるように祈るものである。

ジョン・R・W・ストット

文書委員会議長